

**(目的)**

底質攪拌を行い、底質や底生生物等状況変化を調査し、底質環境の変化を把握する。

有明海の特徴が異なる海域での底質、底生生物等の状況変化を把握するための調査を実施した。

**(調査海域)**

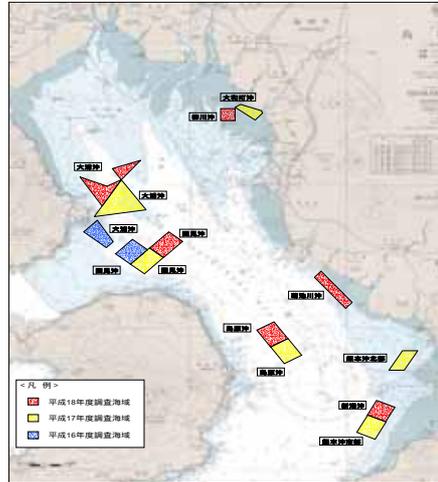
平成16年度: 2海域

平成17年度: 6海域

平成18年度: 6海域

**(調査内容)**

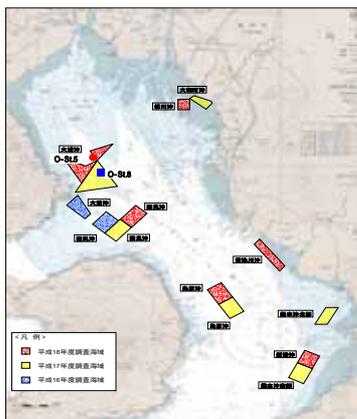
- ・底質調査
- ・底生生物調査 等



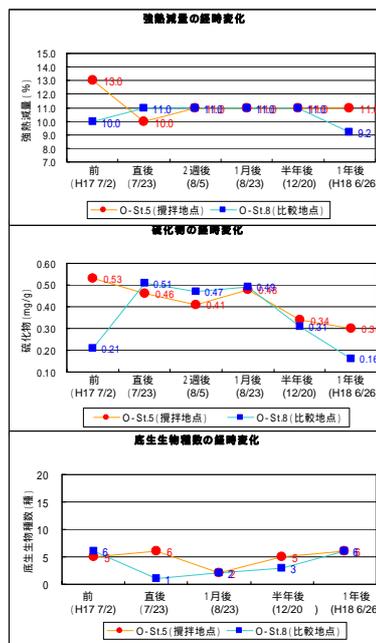
底質・底生生物等調査 位置図

**(底質攪拌調査結果)**

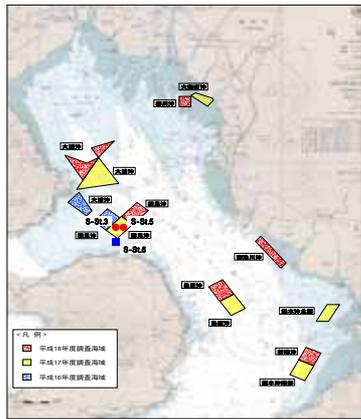
底質攪拌を行った大浦沖St.5では、強熱減量及び硫化物の減少、底生生物の増加の傾向がみられたが、比較地点でも同様の傾向を示した。



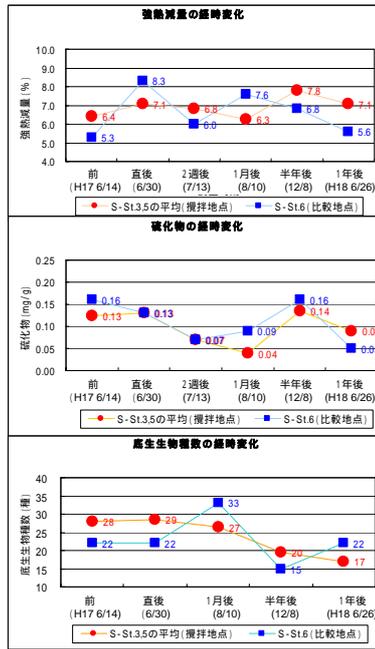
位置図



国見沖のSt.3、St.5では、硫化物が底質攪拌1ヶ月後まで減少したが、比較地点でも同様の傾向を示した。

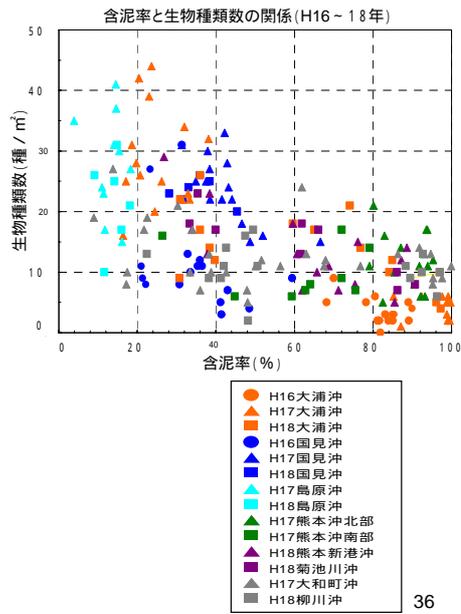
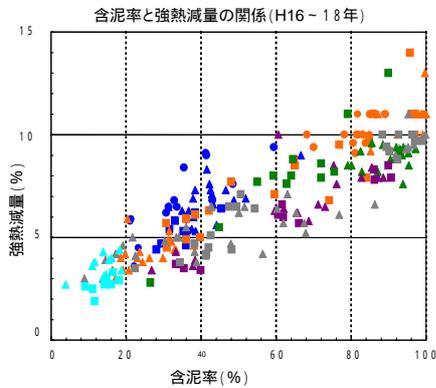


位置図

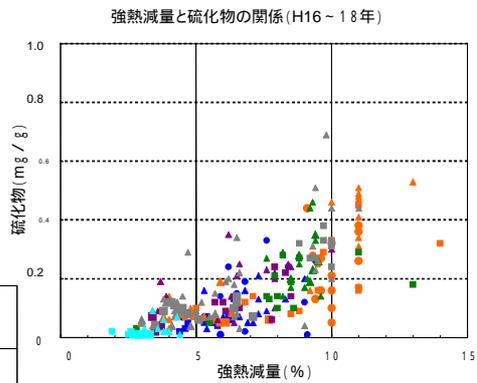
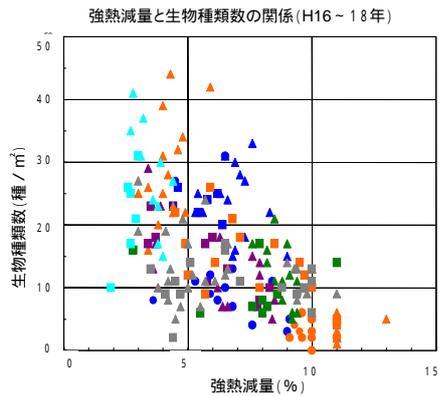


(底質・底生生物調査結果)

含泥率が高い海域は、強熱減量が高く、底生生物の種類が少ない傾向にあった。



強熱減量が高いと、生物種類数は少なく、硫化物量は多い傾向にあった。



(強熱減量は有効数字2桁のため10%以上は整数止まり)

- H16大浦沖
- ▲ H17大浦沖
- H18大浦沖
- H16国見沖
- ▲ H17国見沖
- H18国見沖
- H17島原沖
- ▲ H18島原沖
- H17熊本沖北部
- H17熊本沖南部
- ▲ H18熊本新港沖
- H18菊池川沖
- H17大和町沖
- ▲ H18柳川沖

《底質環境調査による海底のゴミの除去状況》



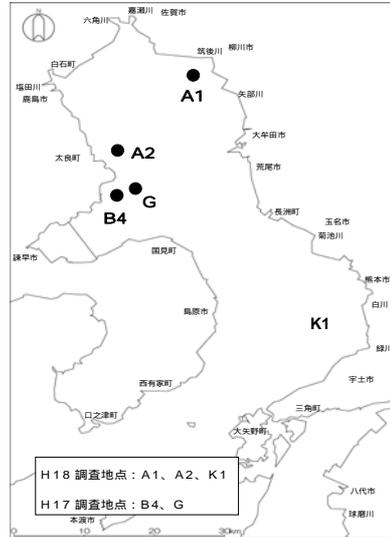
**堆積物の堆積速度を推定  
するための調査を実施した。**

**【調査地点】**

平成17年度 2地点(B4, G)  
平成18年度 3地点(A1, A2, K1)

**【調査内容】**

底質柱状採泥調査  
・鉛 210法およびセシウム137法による堆積速度推定

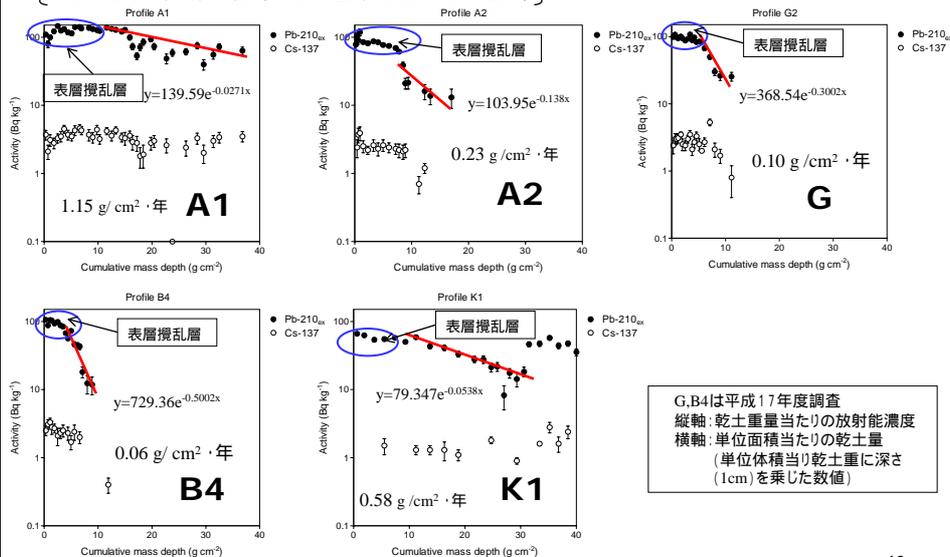


堆積物起源推定等調査 位置図

農業環境技術研究所による分析

**底質柱状試料のPb(鉛)-210ex, Cs(セシウム)-137濃度プロファイルによる堆積速度**

鉛-210ex : 降雨等で地表に降下し堆積した鉛210,  
セシウム-137: 核実験や原発事故など人工的に発生したセシウム137。



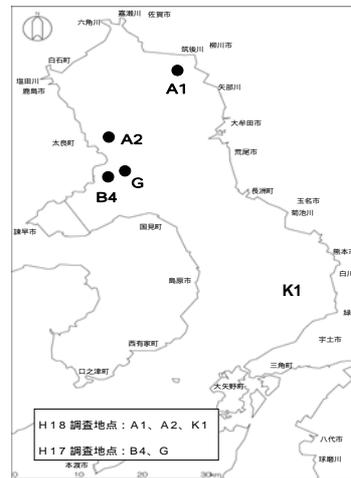
G,B4は平成17年度調査  
縦軸: 乾土重量当たりの放射能濃度  
横軸: 単位面積当たりの乾土量  
(単位体積当たり乾土重に深さ  
(1cm)を乗じた数値)

農業環境技術研究所による分析

《柱状採泥調査結果》

筑後川河口域 (A1)や白川河口域 (K1)で堆積速度が速く、底質の堆積は、筑後川など流量が大きく流域面積も大きい河川からの土砂供給の影響などが考えられる。

調査地点	堆積量 [g/(cm <sup>2</sup> ・年)]	堆積速度 (cm/年)
A1	1.15以上	2.49以上
K1	0.58以上	0.75以上
A2	0.23	0.61
G	0.10	0.23
B4	0.06	0.13



農業環境技術研究所による分析

これまでの調査からわかったこと

- ・底質攪拌により、底質の強熱減量や硫化物の減少、生物種数の増加などの傾向がみられたが、比較地点においても同様の傾向を示したことから、効果は明確ではなかった。
- ・柱状採泥調査では、筑後川河口域 (A1)や白川河口域 (K1)で堆積速度が速く、底質の堆積には筑後川など流量が大きく流域面積も大きい河川からの土砂供給の影響などが考えられる。

平成19年度の調査方針

- ・底質攪拌について区域内の調査密度を高めるなど、調査精度の向上を図る。
- ・柱状採泥調査について有明海における堆積速度の傾向をより詳細に把握するため、引き続き実施する。